

土木の魅力探求「話す」「聞く」「考える」

ダムが観光地？

インフラツーリズムの実態と本音

本企画では、学生委員がチームを組み、それぞれの興味を持っていることを探究する。本企画は3部構成になっており、「話す」では、担当が興味を持った理由や取材前の気持ちを率直に述べる。「聞く」では取材を通して疑問に思ったことを当事者に伺う。「考える」では取材後に学んだことを踏まえて感じたことをチームで共有する。今回は、生活を支えるために存在する構造物であるインフラを観光地に位置付ける「インフラツーリズム」に着目し、モデル地区の一つである鹿児島県の鶴田ダムについて深掘りする。

話す Discussion

中野——なぜダムの観光地化に注目しようと思ったのですか？

泉——近年、「インフラツーリズム」という新たな観光の形が注目を集めています。インフラは本来、生活を支えるために存在する構造物ですが、観光地としての側面に着目した取り組みが各地で進んでいます。特にダムは、その壮大な景観や技術を

部の人たちの間で人気であることを聞いたことがあります。しかし、そのような楽しみ方をするためには知識が必要だったり、そもそも構造物に興味がない人からすると楽しみ方自体が分からなかったりする場合もあると思います。僕も旅先でダムや橋梁を目的地にして観光することは多いですが、マニアックな視点ではなく、一般の人にも伝わる魅力をどのように見せていくのか、という点は気になります。

村岡——ダムに限らず、大規模なインフラや構造物は人の住んでいない山奥など少し距離が離れた立地である場合が多いと感じます。そのような場所に地域の人たちを巻き込んでいくことの難しさもあるだろうと思います。実際にダムの地域におけ

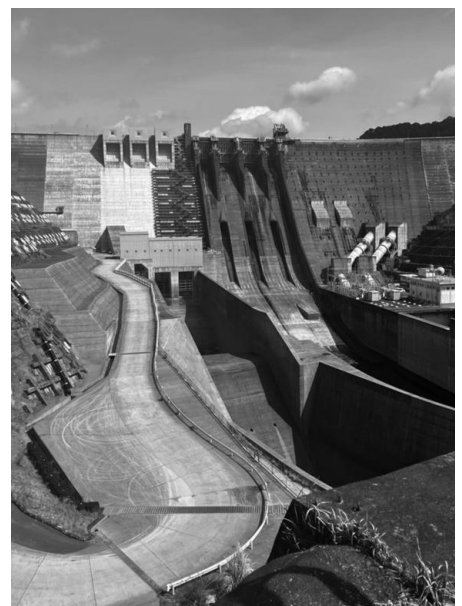


写真1 鶴田ダム堤体

る親しみや、地域のどんな人たちがツーリズムの取り組みに参画しているのかについても聞きたいですね。

聞く Interview

「取材協力者」

有嶋 哲朗氏

国土交通省 九州整備局 鶴田ダム管理所（現・大隅河川国道事務所）

田中 光行氏

NPO法人 ひつろー奥さつま探険隊

日高 一氏

元・鶴田ダム見学案内ガイド

インフラツーリズムのモデル地区の一つである鶴田ダムを訪れ、鶴田ダム管理所の有嶋哲朗氏、鶴田ダム

見学案内ガイドを務めるNPO法人
ひっ翔べ！奥さつま探険隊の田中光
行氏、元・鶴田ダム見学案内ガイド
の日高一氏にお話を伺った。

これまでの経緯

——インフラツーリズムのモデル地
区になった経緯を教えてください。

有嶋——2006（平成18）年7月
に洪水があり緊急放流を行ったところ
下流の被災者の方々からダムへの
批判の声が多く、地域にダムの役割
や治水機能の限界についての説明が
できていなかったことを反省しまし
た。その後国土交通省のインフラ
ツーリズムの有識者懇談会でモデル
地区の議論があり、鶴田ダムが推薦
されました。ダムの情報を伝える使
命感があり、また地域振興につな
がるような取り組みを行いたいと考
え、モデル地区になりました。

日高——ダムについて説明すると専
門用語が多くなり、一般の方にはな
かなか理解できません。それを簡単・
明瞭に説明することがガイドの使命
であり、インフラツーリズムを通じ
て、理解を広げていきたいと思っ

ています。ダムの場合、分かりやすく
伝えることでお客さまの防災意識の
醸成にもつながります。

——NPO法人ひっ翔べ！奥さつま
探険隊ができたきっかけをお教え
てください。ダムに隣接されてる川
内川大鶴ゆうゆう館を委託運営され
ているのですよね？

日高——NPO法人は2006（平
成18）年5月に立ち上げました。当
時、国土交通省で河川関連のNPO
法人の立ち上げの話が出てきたこと
がきっかけでした。また、ゆうゆう
館や館内のレストランはダムができ
た頃からあり、当時はJ-POW
ERと国土交通省、さつま町で共同
運営を行っていました。今はさつま
町が管理してNPO法人に業務委託
して運営しています。行政の施設を
民間で活用している官民連携の事例
であり、今後、地域の中の別の事例
にも適用できるのではないかと思っ
ています。

有嶋——ダムの水源地の活性化に向
けた支援をする取り組みである水源
地域ビジョンが国土交通省の施策で
あり、鶴田ダムも推進計画を策定し、
取り組んでいます。水源地域ビジョ

ン推進計画を作る際に利活用と環境
のそれぞれの視点で議論しました。

利活用の方でNPO法人になってい
ただけたのが「ひっ翔べ！奥さつま
探険隊」でした。環境の方ではまた
別にNPO法人が立ち上がっていま
す。いろいろな活動していくにあたっ
て、直接行政が手を出せない内容も
あり、NPO法人が活躍しています。

田中——ダムにレストランがあるの
は強みだと思っています。他のダム
でも昔は食事処があったが今は駐車
場になってしまったところもあるよ
うです。ダムだけを見に来る方はい
ますが多くはなく、週末にライダー
が来たり、紅葉シーズンには大勢の
観光客が来たりしますが、定常的な
集客は難しいと聞きます。ゆうゆう
館内のレストランは観光客や地元の
住民、平日はダムのメンテナンスや
周辺工事の業者さまの利用が多いで
す。来てくださるお客さんを大事に
しています。

有嶋——ダムを生かした地域振興、
観光振興計画の中に位置付けている
のでさつま町も力を入れています。
ダムの周辺には滝などの観光地もあ
り、通過地点として利用してもらえ

る可能性はあります。

インフラツーリズムの 取り組みと変化

——モデル地区になる前後の変化は
ありましたか。

有嶋——河川空間をオープン化した
ことで見学ツアーが有料になり、ま
た、ひっ翔べ！奥さつま探険隊の
方々がガイドとして活動しているの
で休日の案内もできるようになりま
した。今まで無料で案内していた時
は管理所職員が対応していたため、
出勤している平日のみの受け付けで
した。第2・4日曜日の休日も案内
できるようになり、お客さんも訪れ
やすくなったのではないでしょ
うか。

——ツアーを有料化したことによる
変化はありましたか。

田中——ツアーを有料化したこと
でできることも増えたと思うのです
が、まだポテンシャルを生かせてい
ないと思います。最初、ツアー料金
を500円にしていたのですが、頑
張っても売り上げがなかなか上がら
ない状況でした。金額を上げるには
内容を充実させなければならない

め、いろいろと考えていく必要があると感じます。

—— 実際に見学させていただき、手すりや足元に矢印の案内などが見られ、安全面に考慮されていると感じました。通常業務に加えて、案内準備の業務も生じるとしていますが、職員さんの業務量は増えていますか。

有嶋—— 安全対策に関しては、もともと無料で見学を受け付けていたこともあり、ほとんどそのまま使用しています。有料化した際に頭上にひもを下げたり地面に表示を入れたりといった安全対策をさらに行いました。

—— 私は、初めて見学ツアーに参加したのですが、ヘルメットを装着するイメージだったのでしなくてもいいことに驚きました。

インフラツーリズムの今後と理想像

—— できる範囲で少しずつ取り組まれているとありましたが、事業拡大していく予定はありますか。

有嶋—— 今は有料の見学ツアーに集中して取り組んでいます。見学者

ダム×歴史×グルメ

鶴田ダムは鹿児島県薩摩郡さつま町、川内川水系川内川にある九州最大規模の重力式コンクリートダムで、洪水調節と発電を目的に1966（昭和41）年に完成した。完成後、たびたび洪水に見舞われ、平成18年7月豪雨では緊急放流を行い、流域に甚大な浸水被害が発生した。そのため、洪水調節容量を約1.3倍に増強する日本最大規模のダム再開発事業を行い、2018（平成30）年に完了した。ダムの堤体にダム（大鶴）湖の水深約65mから5本の放流管・発電管の穴をあける大規模な工事だった。2019（令和元）年にインフラツーリズム魅力増進プロジェクトのモデル地区に選定され、ダム内部の見学（要予約）やダム内での焼酎貯蔵、イベントを行っている。

隣接する「川内川大鶴ゆうゆう館」ではダム機能と発電技術の展示があり、レストランでは鶴田ダムカレーやダムチャーハンが楽しめる。周辺には東洋のナイアガラと称される「曾木の滝」や「曾木発電所遺構」「宮之城温泉」などの観光地がある。さらに、川内川流域では推進（しごめ）分水路や石積み堤防、グッドデザイン賞に選ばれた「曾木の滝分水路」など、激特事業とかわまちづくりによる土木景観も見られる。ぜひ訪れてみてほしい。



写真2 ゆうゆう館内のレストランで提供される珍しいダムチャーハン

数が伸び悩んでいる状況なのでさらに考えていかななくてはと思っています。旅行会社などへの広報などに取り組んでいますが、まだまだ見学者数の増加に至っていないため、広報活動を行いつつ、周囲と連携して人が集まるような仕組みをつくれたいなと思っています。

日高—— 堤体内のエレベーターは15人ほどこしか入らず、一つのエレベーターが上り下りするだけでも相当時間がかかります。来てほしいけれど大勢で来場されるとうまく案内ができないことは悩ましいです。

田中—— NPO法人でガイドをし

ていますが、他の業務も並行して行っており、ガイドの業務に使うことができる時間は限られています。専従者がいれば安定して回せると思いますので、まずは体制を整えることから取り組みたいと考えています。

インフラツーリズムに対する思い

—— ダム本来の治水利水といった機能に加え、観光という新たな要素が加わることに對して携わっている方としての思いや考えをお聞かせください。

有嶋—— ダムの役割や機能を発信して地域の防災力が上がっていくのでインフラツーリズムをやるのは非常にいいことだと思います。ただし、今はダム見学の見学のみでのガイド運営は難しい状態となっており、活動資金を持続的に得る方法を考えていきたいと思っています。

日高—— 集客力を考えると、お客さんからのツアー料金収入だけで運営していくのは難しいと感じています。だからといって、ツアー料金を値上げしてしまえば、来場者が減り防災発信をできなくなってしまうと思います。今後、いろいろな取り組みも加

わってくるのではないかと思います
が、ツアーがメインであることは変
わらないと思います。ただ、その中
で、今のツアー料金・集客数で持続
的にやっていけるのか、なんとも言
えません。体制や活動内容を見直す
必要があると感じています。

田中—— 今後も、今までのように手
の及ぶ範囲で取り組みながら活動
がさらに浸透して、周知が広がって
きたらグッズなどを出してみたいと
思っています。また、廃止されてし
まったキャンプ場は、何か活用でき
るといいなと思っています。

—— モデル地区となっており、他の



写真3 施設案内・取材に応じていただいた方々（上段左から永江氏、日高氏、田中氏、有嶋氏）

ダムと比べて、インフラツーリズム
に関する取り組みは一歩進んでいる
と思いますが、他のダムもインフラ
ツーリズムに取り組んでいくべきだ
と思いますか。

日高—— 他のダムの関係者が見学に
来ることがあります。ダムの管理所
職員だけでなく、関係者、NPO法
人を立ち上げたい方などと一緒に来
られたりもします。ガイドの様子や
どういったダムの魅せ方をしている
のかに興味があるようです。

田中—— ダムごとに状況が違うと思
いますので、一概には言えませんし、
実現し、さらに持続することはなか
なか難しいですが、やる気
次第で、周囲からの協力は
得られるのではないでしょ
うか。

有嶋—— 鶴田ダムは地域
の要望があつてオープン化
し、インフラツーリズムの
取り組みを行っています。
地域との合意がないとオー
プン化できないのですが、
地域住民が望むのであれば
取り組んでほしいと思つて
います。

（2025年3月12日（水）・鶴田ダム
管理所にて）

（聞き手…泉・中野・村岡）

考える Analysis

泉—— 私は今までにいくつかダムを
見学させていただいたことがありま
したが、鶴田ダムのガイドは特に分
かりやすかったです。監査廊内での

解説やゲートモチーフにしたキャ
ラクターなどからインフラツーリス
ムに力を入れていることが感じ取れ
ました。説明では専門用語がほぼ無
く、かみ砕いて説明されていて、地
域住民の方にも伝わる内容だと感じ
ました。ダムをより身近に感じても
らえると思います。今後、インフラ
ツーリズムが他のダムに広がってい
けば、それぞれのダムの特徴・環境
にあった内容が生まれてくると思う
のでぜひ広がってほしいです。

中野—— 僕が一番興味深いと感じた
点は、「できることから始めてみよ
う」という姿勢が地元のNPOの方
からも整備局の方からも感じられた
ことでした。訪れた人にダムという

施設を面白く説明する工夫や、少人
数規模でも丁寧に案内して魅力を
知ってもらおうとする姿勢には、ダ
ムの新しい見方を知ってもらふこと
につながると思います。このダムを
訪れた人が、他の誰かに教えたくな
るお土産話として持って帰ってもら
えたら、インフラに対する捉え方も
少しずつ変わっていくような気がし
ました。

村岡—— 取材を通して、ダムをより
身近に感じてもらいたいという思い
が強く伝わってきました。一方で、
山間部に位置する立地のため、交通
の便や周辺観光地の少なさなど、ダ
ム観光を持続可能なビジネスにする
には集客面での課題が多いと感じま
した。こうした課題を乗り越え、近
隣自治体や旅行会社との連携体制が
整っていけば、ダムマニアだけでな
く一般の人にも気軽に訪れやすい場
所になるだろうと思いました。この
ような取り組みが広がることで、イ
ンフラツーリズムがより魅力的で一
般的なものになっていく可能性を感
じました。

（学生編集委員…泉 奈穂、中野太雄、
村岡泰輝）